

CONTENTS

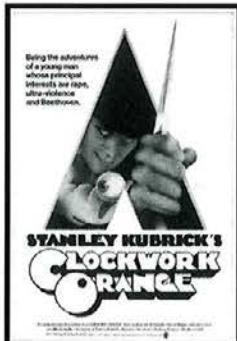
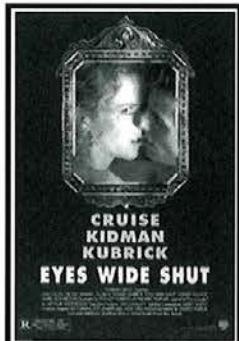
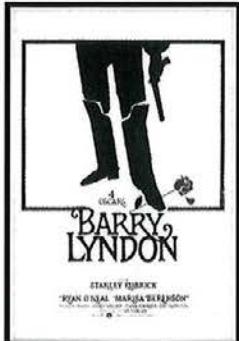
●特集

- スタンリー・キューブリック
- キューブリック・フィルモグラフィー
- 『博士の異常な愛情』又はキューブリックは如何にして軍拵の時代に核に対する憂慮を抱いていたのか

IMAGE LIBRARY NEWS

●●●イメージライブラリー・ニュース 2003年4月 第13号 ●●●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーは館内でご覧になれます。



特集●スタンリー・キューブリック

STANLEY KUBRICK

文・構成 狩野志歩

1928年、アメリカのブロンクスに生まれたスタンリー・キューブリックは、13歳の誕生日に医者の父親からカメラを贈られる。ハイスクールでの成績は悪かったが、授業よりも写真やジャズ、チエスに夢中になつた少年時代であった。16歳の頃、その後の運命を決定づける一枚の写真撮ることになる。ルーズベルト大統領の死を報じる新聞に悲痛な面持ちで見入る老人の写真。これが写真雑誌「ルック」に買い上げられ、それが縁となり、成績の悪さで進学できなかつたキューブリックに専属カメラマンとしての道を開いた。

フォトジャーナリストから映画監督へ

そこでキューブリックもまた謎に包まれ様々な憶測と噂の中に生きた人であった。マスクも嫌いで、ほとんど人前に姿を現さず、飛行機嫌いで旅行はいつも客船。役者には完璧な演技をするまで何百回とテイクを重ねる、といった噂によつて隠遁者や偏屈者と呼ばれ、作品は毎回物議を醸し、けれども必ずヒットする。作品についてはほとんどコメントせず、稀にインタビューを受けても質問事項の事前提出を求め、作品のようにコントロールしたがる。その言葉すら作品の深淵へとは導いてくれない。彼に最も近づきたかつたら、遺された作品を見るほかはない。「私は万巻の映画美学の本を読むよりも、映画を見ることがより多くを学んだ(*1)」と彼が言うように、その時代毎に直面し、挑戦してきた問題や全ての作品に通底するものが作品の中にはちりばめられているはずだ。キューブリックという宇宙の旅への入口として、彼の歩んできた道を辿つてみようと思う。

映画監督スタンリー・キューブリック死去。1999年、突然の訃報に誰もが耳を疑つた。12年ぶりの新作『アイズ ウィド シャツ』完成試写のわずか5日後というタイミングと死因など詳しい状況は一切伏せられているという報道に、キューブリックらしい最期だと思つたのを憶えている。それから、もはや彼の次回作を永遠に見ることができなくなつたということも、私達に遺されたのは遺作を含めてわずか十数本の映画だけである。

『2001年宇宙の旅』を見たことがなくとも、「ツアラトウストラカク語りき」や「美しく青きドナウ」の調べを耳にして壮大な宇宙空間や流麗な宇宙遊泳をイメージしない人はほとんどいないだろう。21世紀の幕開け、地球外知的生命体に導かれ、人類が目指す星の彼方への壮大なオデッセイを描いた『2001年』が公開された1968年当時、私達はいまだ月にさえ届いてはいなかつた。タコ型の宇宙人が地球を侵略するよつた非科学的なSF映画ばかりの中で、徹底的な調査・考證による完全なリアリティとスリットスキンをはじめとする技術革新、クラシック音楽の画期的な登用など、この作品の登場はSF映画のみならず映画史における一つの事件ともいえる。そして、上映時間2時間20分のうち、台詞があるのはわずか40分であるという事実を知る時、映画は視覚体験以外の何ものでもないということに改めて気付かされるのである。これほどあらゆる方位に影響を与える様々な解釈を生み、人々の記憶に刻印された映画はない。



博士の異常な愛情

その頃、映画監督を志す友人の影響で、ほとんど毎日のように映画館へと通った。新作は近くの劇場で、古典映画はNY近代美術館で見た。映画監督となつてからも「全ての映画を見たい」と言つて、自宅の試写室に何千本ものフィルムを届けさせていた。映画を学んでもいないキューブリックは、映画を見ることで学ぶ術を覚えた。それも良い映画からではなく、酷い映画ほど（自分だつたらこれほど酷い映画は作らないだろう、と思ひながら）学ぶことが多かつた。

そして、友人からニュース映画の制作に4万ドルもかけていると知ると、自分ならばもっと安くできる、最初の短編映画『拳闘試合の日』（1951）を作ることにした。これは以前「ルック」に掲載された、プロボクサーが試合に勝つまでの一日を追つたフォトエッセイを映画として撮り直したものである。この作品を3900ドルで作り、大手スタジオのRKOに4000ドルで売つて見事に100ドルの利益をあげた。このささやかな成功でRKOから資金を得て、2本目のドキュメンタリーを制作。「ルック」を辞めて本格的に映画作りに専念することを決心する。

長編第一作である『恐怖と欲望』（1953）の為に親戚や知人から資金をかき集め、監督はもちろん全ての仕事を一人でこなした。キューブリックはこの初期作品を未熟なものと言つてはいるが、その未熟さ故に大金を無駄にした経験から、製作資金を効率的に使うことを学んだ。ほとんど自主制作といつていいこの作品を見た映画関係者たちは、キューブリックが撮影も編集も一人で手掛けたことを知り驚愕した。当時、映画はスタジオが金を出し、スタッフも役割毎にそれぞれ口出しをせずに作るものだという常識がまだまだあつた。個人資本と少人数のスタッフから成るインディペンデント映画がアンチ・ハリウッドを標榜し、巨大スタジオ・システムを変革させる時代にはまだ早かったのである。しかし、

キューブリックにとって写真の知識は撮影を助け、機材の使用方法はレンタル会社で借りるついでに半日ほど教えてもらうだけで十分だった。

ハリウッドへ

長編二作目の『非情の罠』（1955）の制作中にキューブリックは同じ年の若きプロデューサー、ジェームズ・B・ハ里斯と出会い、ハリス・キューブリック・ピクチャーズを立ち上げた。次の企画としてライオネル・ホワイト原作の『逃走と死』の映画化をユナイトに持ち込み、『現金に体を張れ』（1956）というタイトルがついたこの作品ではじめてプロの役者とスタッフを使い、ハリウッド・レビューを果たした。伝統的なフィルム・ノワールのスタイルを踏襲つつ、時間が往還する斬新な展開で描いたこの作品にハリウッド内外から注目が寄せられた。またオリジナルの脚本ではなく、原作を採用するようになつたのもこの作品からである。

続く『突撃』（1957）では第一次大戦中のフランス軍で起つた実話を元にした原作の映画化で、大スター、カーラ・ダグラスが脚本を気に入り出演を快諾した。軍隊という組織構造の中の不条理を描き出したこの作品で、人間を徹底なまでに見つめるキューブリックの視線と左右対称に代表される完璧にコントロールされた画面構成という、彼の作品スタイルが既に芽吹いていた。評判は良かつたものの、なかなか次の企画が決まらなかつたキューブリックにある日突然大作映画の話が飛び込んで来た。前作で彼に目をつけていたダグラスが、自らのプロデュース・主演の歴史スペクタクル『スバルタカス』の監督に抜擢したのである。台頭してきたテレビに押されていたハリウッドで『ベン・ハー』（1959）や『クレオパトラ』（1963）などの莫大な予算の超大作が次々と出現した頃でもあつた。

1960年に完成した作品はアカデミー賞4部門を獲得し、ハリウッドの監督として一躍有名になつ



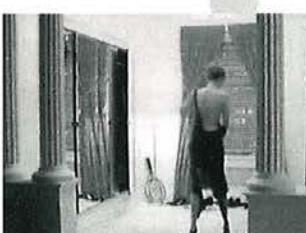
時計じかけのオレンジ

たが、実情はシナリオの決定権を奪われ、何一つ思うように変更できない完全な雇われ監督であった。そしてこの経験が、監督よりもプロデューサーやスタッフ幹部が絶対的な権限を持つハリウッド・システムへの懷疑を決定的にしていく。

ハリウッドから離れて

キューブリックは同い年の若きプロデューサー、ボコフの問題小説の映画化に着手し、ナボコフ本人に脚本を依頼する。『ロリータ』は12歳の少女の虜となり、翻弄される中年男を描いており、その内容が1955年の出版当初から問題となつた小説である。当時のアメリカ映画は『プロダクション・コード』と呼ばれる検閲システムによつて、暴力や性、権力の描き方などが脚本段階でチェックされていた。映画『ロリータ』の性描写は厳しい検閲にとても通らないだろうと思われた。このハリウッドの管理システムから逃れる為、また制作資金の都合上、スタジオも含めて撮影は全てイギリスで行なわれた。公開されてからもカトリック勢力などから批判を浴びたがそれがかえつて話題となり興行的には成功した。その後ハリスと円満に別れたキューブリックは、自らプロデュースも手掛けられたキューブリックは、自らプロデュースも手掛けられるようになり、制作や生活の拠点もイギリスへ移し、これで完全に「自分の」映画を撮れる環境が整つたことになる。

1964年の『博士の異常な愛情』又は私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになつたか』で、ついにキューブリックの世界は確立したといえる。そこには『現金に体を張れ』の構成、『突撃』の不条理、『ロリータ』で描ききれなかつたブランク・ユーモアが見事なまでに結実し、他の凡百の映画との差を見せつけられる。特に全てが後の祭となつたラストで流れる皮肉に満ちた「また逢いましょう」のボップスは、キューブリックの音楽に対



アイズ ワイド シャット



ロリータ

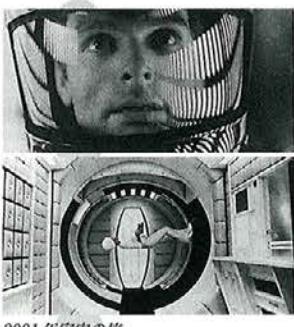
する非凡な才能が開花した瞬間である。冷戦下、核や核戦争への恐怖は誰もが抱いていた。些細な事故がきっかけで起こりうる偶発的核戦争を描く為、あらゆる専門書を読み漁り、研究を重ねた結果、つまるところ米ソの構造自体の愚かさに気付いたキューブリックはこの作品を痛烈な皮肉とブラック・ユーモアで飾り、その小気味良いエンディングに誰もが熱狂した。

さらにB-52爆撃機内部のセットにもリアリティを追求した。マニア雑誌から推測して組んだそのセットに、軍部の人間が見学に来た時の慌て振りでいかにリアルな再現だったかが実証された。完全主義は細部へのこだわりだけでなく予告編にも及び、他のスタッフに任せられず自分で手掛けた。以降、ボスター・デザインや新聞広告の大きさ、外国语字幕にまで細かい指示とチェックが入るようになり、その完全主義ぶりが噂と共に世間に広まつてゆくだけた。

『2001年宇宙の旅』

批評家や同業の監督からの評価、観客の支持、製作会社の信頼も得て、安定した環境の下、キューブリックは最も野心的な作品にとりかかることができた。それが『2001年宇宙の旅』である。1960年代に入り、米ソの宇宙開発競争が始まり、アメリカはケネディ大統領が宣言したように、何としても60年代のうちに人類の月面着陸を遂げるというアポロ計画に着手。キューブリックがMGMに企画を持ち込んだのは丁度その頃であつた。SF小説の重鎮アーチャー・C・クラークの短編『前哨』をもとにキューブリックはクラークと脚本を共同執筆し、わずか数頁だった小説は最終的に130頁にも膨れ、映画完成と同時に小説も出版された。

これまでにない全く新しい、そして長く語り継がれるSF映画を作る為に、二人は徹底したりアリティにこだわつた。世界中から宇宙関連の書籍や資



2001年宇宙の旅



バリー・リンンドン



フルメタル・ジャケット

その後、キューブリックの生み出した作品はことごとく問題作として人々に注目されることとなる。『時計じかけのオレンジ』(1971)では暴力描写が問題となり、『パリー・リンンドン』(1975)で

それから…

50年代に処女作を撮ったキューブリックは、映像芸術が技術の進歩と共に、より自由な表現形式を模索し獲得していく時代から現在に至るまで、ずっと先頭を走り続けてきた。それも商業映画という最も前衛からかけ離れている場所で、かつて誰も見たことのなかつた最も自由な作品を死の直前まで作り続けた希有の作家である。公開当時、人々を混

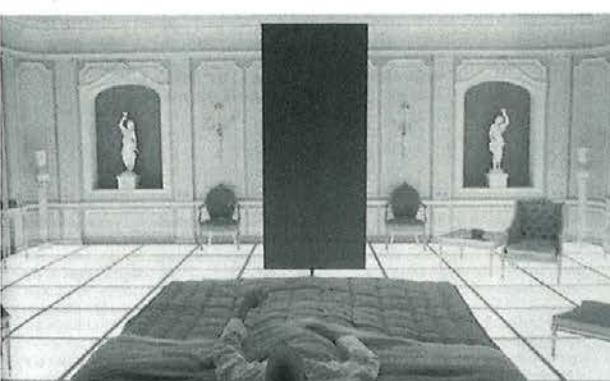
こうして4年もの歳月を経てようやく完成した『2001年』の出だしは最悪だった。アメリカで劇場公開に先駆けて試写された時、その場にいた批評家たちのほとんどが戸惑った。彼らは撮影の技術革新には感心したもの、この難解な内容に関してどう判断してよいか全く分からず、こぞつて否定的な評を書いて、この作品を莫大な予算をかけた退屈な科学映画だと断罪した。公開後もほとんどの観客がストーリーや結末の不明瞭さに不満を持った。しかし、何人かの若い観客たちがこの作品の新しさを感じ的に受け入れ（インテリ層は作品の哲学的意味について論じ、ドラッグカルチャーに溺れた若者たちはスター・ゲイト・シーンでトリップした）、徐々に観客が劇場に戻ってきたのである。慌てた批評家たちは次々と前言を撤回し、今度は擁護する立場へと転じた。結果的に『2001年』の興業は成功し、時を経る毎にその評価は不動のものとなつた。

料を集め、NASAやIBMの助言を仰ぎ、宇宙船の構造やコンピュータのデザインはもちろん、宇宙飛行士の腕時計にまで未来のリアルな姿を求めた。また、越えなければならない技術的な壁も多かつた。60年代の映画技術は今では信じ難いほどに粗末なもので、宇宙船内に設置された制御パネルの計器に映っている波形は、スタッフが1コマ1コマ手描きで作ったアニメーションであつたし、宇宙遊泳のシーンは役者を宙吊りにして撮影された。ワイヤーを後からデジタル処理で消す事など当然できなかつたので、横から撮る時にはワイヤーがカメラに写らない様、役者を横向きに吊るさなければならなかつたのである。

こうして4年もの歳月を経てようやく完成した『2001年』の出だしは最悪だった。アメリカで劇場公開に先駆けて試写された時、その場にいた批評家たちのほとんどが戸惑った。彼らは撮影の技術革新には感心したもの、この難解な内容に関してどう判断してよいか全く分からず、こぞつて否定的な評を書いて、この作品を莫大な予算をかけた退屈な科学映画だと断罪した。公開後もほとんどの観客がストーリーや結末の不明瞭さに不満を持った。しかし、何人かの若い観客たちがこの作品の新しさを感じ的に受け入れ（インテリ層は作品の哲学的意味について論じ、ドラッグカルチャーに溺れた若者たちはスター・ゲイト・シーンでトリップした）、徐々に観客が劇場に戻ってきたのである。慌てた批評家たちは次々と前言を撤回し、今度は擁護する立場へと転じた。結果的に『2001年』の興業は成功し、時を経る毎にその評価は不動のものとなつた。

最後の作品

そして遺作となる『アイズ ウィド シャツ』(1999)である。あのキューブリックの久しづりの新作、それもハリウッドを代表する大スター、トム・クルーズとニコール・キッドマンの夫婦共演(*2)、テーマは（性）や（夢）とあれば話題にならないはずがない。あらゆるジャンルやテーマを通して見える力（戦争、地球外生命体、運命、幽靈…）によつて決定される人間それ自体を扱つてきたキューブリックが、最後の作品で人間の根幹に目を向けたことは興味深い。そして公開されてからの世間の反応、特にラストカットの台詞に賛否両論おこつた時に、私は確かに安心したものだ。もはや巨匠と呼ばれるキューブリックの作品は老成するどころか、まだ瑞々しさと限り無い可能性を秘めている、と。



2001年宇宙の旅

乱に招いた『2001年宇宙の旅』を35年の時を経た今、視覚言語として理解することができる私達は、彼の作品に導かれて成長してきたともいえる。そして、21世紀を目の前にして遺された『アイズ ウィド シャツ』に漂うキューブリックの最後のメッセージ。それを知るにはもう少し先に進まねばならないかもしれない。まるで『2001年』で出現したモノリスのごとく屹立する彼の作品群は、時を経る毎に映像芸術の新たな可能性を見せてくれるに違いない。



『時計じかけのオレンジ』撮影中のキューブリック

カメラ・アイ—キューブリックと写真

キューブリックが最初に映像に関わりを持ったのは、スチールカメラのファインダーを覗いた瞬間だった。以来ずっと、彼はその小さな穴から果てしない世界を切り取ってきた。

スチールカメラがムービーカメラに代わってからも、キューブリックはカメラのそばを離れなかつた。必ずファインダーを覗き、自らカメラを持って撮影する光景も珍しくなく、これは撮影監督に構図やレンズの決定を委ねる一般的な撮影方法とは大きく異なる、キューブリックの特徴ともいえる。『2001年』は70ミリ映画だったが、月で発掘されたモノリスのシーンを、とても一人では抱えきれない大型カメラをスタッフに支えてもらしながら撮影を敢行した。

フォト・ジャーナリストであったキューブリックの興味は常に人に向けられたが、その視線は戦場カメラマ

ンの如く冷静な観察者のそれである。しかし、『非情の異』のボクシング・シーン、『博士の異常な愛情』の基地侵攻シーンなど、作品の中で効果的に使用される手持ちカメラの緊迫感にファインダーの向こうにいるキューブリックの息づかいを感じることができる。手持ちによる主観ショットはキューブリックの目を通して観客自身の目と交錯し、観察者としての共犯関係を否応なく結ばれてしまうのである。

その主観ショットが恐怖という形で現れたのが『シャイニング』である。手振れを吸収するステディカムは、ホテルの回廊を三輪車で走るダニーを滑らかにそして無気味に追う。廊下の果てで会う双児の少女たちは、キューブリックが青年の頃交流のあったといふ写真家、ダイアン・アーバスの双児の写真にそっくりだ。

Day of the Fight

拳闘試合の日

1951年／16分／モノクロ

STAFF ●制作＝スタンリー・キューブリック／ジェイ・ポンスフィールド ●脚本／撮影＝スタンリー・キューブリック
CAST ●ウォルター・カルティエ／ヴィンセント・カルティエ

キューブリックが映画の世界に足を踏み入れた最初の作品。1949年に雑誌「ルック」にウォルター・カルティエというミドル級のボクサーの一日を撮った組写真「プロボクサー」が掲載された。『拳闘試合の日』は、いわば「プロボクサー」の再演で、ウォルター・カルティエの別の一日を記録した短編ドキュメンタリーである。この作品はRKOに売れ、ニューヨークの劇場で上映された。

Flying Padre

空飛ぶ牧師

1951年／8分／モノクロ

STAFF ●制作＝バートン・ベンジャミン ●脚本／撮影＝スタンリー・キューブリック ●音楽＝ナザニエル・シルクレット
CAST ●フレッド・シュタットミューラー

RKOのプロデューサーに依頼され制作した、フレッド・シュタットミューラーというニューメキシコの牧師のドキュメンタリーである。単発の飛行機で教会の教区民の元を飛び回る牧師の日常と事件を追っている。

The Seafarers

海の旅人たち

1952年／30分／カラー

STAFF ●制作＝レスター・クーパー ●脚本＝ウィル・チエイン ●撮影＝スタンリー・キューブリック
CAST ●ナレーター＝ドン・ホレンベック

1953年に公開された『恐怖と欲望』の制作資金を補うために制作した、船員組合の宣伝映画。キューブリック初のカラー映画である。

Fear and Desire

恐怖と欲望

1953年／68分／モノクロ

STAFF ●制作＝スタンリー・キューブリック／マーティン・パー・ヴィラー ●脚本＝ハワード・O・サックラー ●撮影＝スタンリー・キューブリック ●音楽＝ジェラルド・フリード
CAST ●フランク・シルヴェラ／ポール・マザースキー／ケネス・ハーブ／スティーブ・コイト

キューブリックのはじめての長編劇映画。敵の戦線内に不時着した4人の兵士が、敵兵や偶然捕らえた若い娘、降伏した将軍を殺し、将軍機を奪つて脱出するまでを描いた反戦映画である。キューブリックは「敵意に満ちた世界の中で道を見失った『人間』のドラマ」と語るが、後に、この映画を「まったく駄目な出来損ない」として、一般人が見ることができないようにしてしまった。



『恐怖と欲望』同様、監督ばかりか撮影、編集、録音、美術まであらゆることをキューブリック一人でこなした低予算映画である。ウェルター級プロボクサー、デイヴィ・ゴードンの三日間を描いた犯罪ドラマ。試合で負けたデイヴィはその夜、向かいの部屋に住む女性グロリアと知り合い、やがて愛し合うようになるが、そのことから犯罪に巻き込まれていく。男たちに銃を突きつけられたそのとき、デイヴィとグロリアは互いの裏切りを目當たりにするが、二人は何事もなかつたかのように手を取り合って、共にシンアトルへむけて旅立っていく。キューブリックは、互いの偽善を知りながらも二人がその偽りとともにやつていこうとする姿を、デイヴィが待つ駅のホームに駆け寄つてくるグロリアの姿を捉えたラストシーンで皮肉を込めて描いている。キューブリックはこの作品で本格的にデビューを果たした。

(文・田中)

STAFF ●制作＝スタンリー・キューブリック／モ里斯・ブーゼル ●原案／編集／撮影＝スタンリー・キューブリック
●脚本＝ハワード・サックラー（アンクレジット） ●音楽＝ジェラルド・フリード
CAST ●フランク・シルヴェラ／ジェイミー・スミス／アイリーン・ケイン／ルース・サポートウカ

の主觀を体験することによって、後にそのほつれの原因となつていく彼らの行動を映画中少しづつ知っていくという仕掛けである。リアリティを出すために多用された自然光での撮影による、ざらついた光の中に描かれた犯罪劇。ちなみにアート・ディレクターのルース・サポートウカは「非情の罠」でグロリアの姉のパトリーナを演じた人物で、このときのキューブリックの妻である。

(文・田中)

非情の罠

1955／モノクロ／67分

現金に体を張れ

1956／モノクロ／84分

Killer's Kiss

The Killing

The Killing

STAFF ●制作＝ジェームズ・B・ハリス ●共同制作＝アレクザンダー・シンガー ●脚本＝スタンリー・キューブリック ●原作＝ラオネル・ホワイト「逃走と死」と ●撮影＝ジル・シャン・バラード ●衣装＝ジャック・マスターズ ●音楽＝ジェラルド・フリード
●アート・ディレクター＝ルース・サポートウカ
CAST ●スター・リング・ヘイドン／コリーン・グレイ／ヴィンス・エドワーズ／シェイ・C・フリッパン／テッド・デ・コルシア／メリー・ウインザー／エライシャ・クック／ジョー・ソウヤー

STAFF ●制作・脚本・原作：ジエラード・B・ハリス ●脚本：スタン・リー・キューブリック・カルダー・ウインガム・ジム・トンプソン ●原作：ハンフリー・コップ「栄光の小径」 ●撮影：ゲオルギー・クラウゼ ●音楽：ジエラルド・フリード
CAST ●カーラ・ダグラス／ラルフ・ミーカー／アドルフ・マンジュウ／ジョーン・マクレディ／ウェイン・モリス／クリスティン・チャード／アンダーリン／ティモシー・キャリル／ジョセフ・ターケル／スザン・クリスティアン



高校時代、キューブリックが楽しんで読んだ数少ない小説のひとつ「栄光の小径」の映画化。当初、この企画を映画化しようとする会社はなかつたが、「現金に体を張れ」を気に入つて俳優たちが、『現金に体を張れ』を気に入つて俳優たちが、『現金に体を張れ』を気に入つて俳優

カーラ・ダグラスがキューブリックと契約をしたことで、ユナイテッド・アーチストが資金を提供するに至つた。フランス軍の701歩兵連隊は、対ドイツ戦線で自殺行為とも呼べる総攻撃の命令を受けた。案の定、作戦は失敗に終わり、師団長のミロー将軍は連隊長ダックスの必死の弁護にも耳を貸さず、敵前逃亡のかどで罪のない兵士を処刑してしまう。ダックス連隊長はその理不尽さにミロー将軍を軍法会議にかけることに成功するが、彼の連隊には前線復帰の命令がおりていた…。

キューブリック2作目の戦争映画で、フランス軍の権力者による駆け引きと兵士の死を描いている。死の恐怖の上に行なわれる戦争という状況のなかでは、人はその本質にまで精緻され、そこに純粋なドラマが生まれる。キューブリックは、それを客観的な目で捉えることによって、戦争のひずみや矛盾を浮き彫りにしていくのである。

ラストシーンで、



フランス兵の捕虜となつたドイツ人女性を演じたスザン・ネイクリステイアは、キューブリックの当時の交際相手で、後にキューブリックの死に至るまでの40年間の伴侶となつた。

(文・田中)

STAFF ●制作総指揮：カーラ・ダグラス ●制作：エドワード・ルイス ●脚本：ダルトン・トランボ ●原作：ハワード・ホアスト「スパルタカス」 ●撮影：ラッセル・メティ ●音楽：ザンダード・ゴリツエン ●アート・ディレクター：オーボム ●メイン・タイトル：ソウル・バス

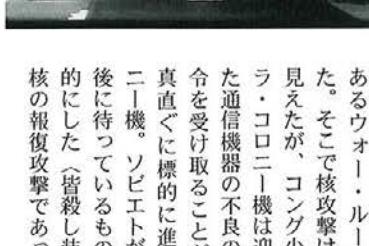
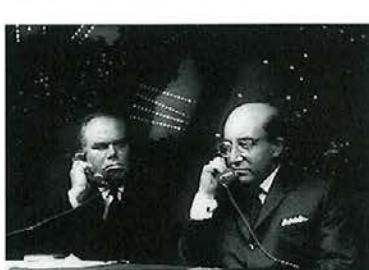
CAST ●カーラ・ダグラス／ローレンス・オリヴィエ／ジョン・シモンズ／チャールズ・ロートン／ピーター・ユースティン／ジョン・ギャヴィン



この作品は『突撃』の主演俳優カーラ・ダグラスによる企画で、当初、ユニヴァーサル映画の決定によりアンソニー・マンが監督として撮影を行つていた。しかし、カーラ・ダグラスは、マンと意見が正反対であつたために彼を解雇し、キューブリックを後任として監督に迎えた。キューブリックは、もうすでに走り出していた映画の手綱をにぎることになったのである。後年、彼は曖昧にではあるが、この映画を自分の映画と認めない姿勢をとつていたという。

剣闘士となるべく訓練されていた、トラキア人の奴隸スバルタカスは、大規模な反乱を扇動し、奴隸たちを解放して自由の地へ旅立とうとする。しかし計画は失敗し、彼らの多くはローマ軍に殺され、スバルタカスもまた磔にされてしまう。そのとき、離れ離れになつていた彼の妻が目の前に現れ、生まれたばかりの赤子を高く差し出した。彼は、自分の妻子が自由になつたことを悟つた。

雇われ監督に徹したというキューブリックの言葉どおり、この映画には、キューブリック映画のもつリアリティや独特な性格描写は見られない。しかし、広漠とした草原でローマ軍と反乱軍の兵士が、まるでチエス盤の上の駒が動くように規律に従つて移動するシーンは、後の作品『バリー・リンドン』を想起させるし、整然とした動きを統制するために、スペイン軍の本当の歩兵8000人を使つたという点は、キューブリックの完全主義を垣間見ることができる。



アメリカで文学を教えるためにヨーロッパからやつてきた中年男ハンバートが、ローティーの少女ロリータに心を奪われ、彼女に対する溺愛と異常な情熱の果てに、殺人を犯すまでを描いている。

イギリスでしか使えないという制作費の条件を満足させるために理性を失つていくハンバー

トの罪悪感と、それを翻弄する周囲の人々の罪、さらにはエロスと死の構図を描こうとした

キューブリックの意図は、大きく薄れてしまつたといえる。劇中、変装をしてハンバートの前に現れるクイルティを演じたピーター・セラーズは、キューブリックの次作『博士の異常な愛情』でも一人三役をこなしている。

キューブリックは、この作品をきっかけに活動の拠点をイギリスへ移した。

(文・田中)

又は私は如何にして

心配するのを止めて水爆を愛するようになったか

STAFF ●制作・脚本・原作：ジエラード・B・ハリス ●脚本：エドワード・モリス ●衣装：エルザ・フェンネル ●アート・ディレクター：ビル・アンドリュース ●音楽：ザンダード・ゴリツエン ●アート・ディレクター：ローレンス・ターナー・セラーズ／シェリー・ウインタース

CAST ●スー・リオン／ジエラード・メイスン／ピーター・ジヨン／ジエラード・モリス／ジョン・ジョンソン／チャールズ・ローレンス・オリヴィエ／ジョン・アダム・ダグラス／ローレンス・オリヴィエ／ジョン・シモンズ／チャールズ・ロートン／ピーター・ユースティン／ジョン・ギャヴィン

米国空軍の戦略司令官であるリッパー将軍は、ソビエトの共産主義者が米国の水道に科学化合物(フッ素)を混入させ、米国民の命を脅かしているという妄想に反して、凶暴な武器へと変わる。1964年に制作されたこの作品は、偶発的な出来事が核戦争へと発展し、世界の破滅に至るということをシニカルに描いている。

米国空軍の戦略司令官であるリッパー将軍は、ソビエトの共産主義者が米国の水道に科学化合物(フッ素)を混入させ、米国民の命を脅かしているという妄想にとり憑かれ、ハープルソン空軍基地の爆撃隊にソビエトへの核攻撃命令を意味する暗号を伝えた。事態の知らせを受けたアメリカ大統領はソビエト首相に電話し、事態をできるだけ簡単にさめるような語り口で、心ならずもアメリカがソビエトに向かって核攻撃を行おうとしていることを知らせる。一方、ハープルソン空軍基地ではマンドレーク大佐が、リッパー将軍しか知らない命令撤回の暗号を聞き出そうと試みるが、将軍は自殺を図る。あれこれ推測するうちに暗号を解明したマンドレーク大佐は最高指令部であるウォードルームにそれを伝えた。そこで核攻撃は回避されるかに見えたが、コンング少佐の乗つたレブラ・コロニー機は迎撃によって受けた通信機器の不良の為、この撤回命令を受け取ることができなかつた。真直ぐに標的に進むレブラ・コロニー機。ソビエトが核攻撃を受けた後に待つているものは、全世界を標的にした「皆殺し装置」と呼ばれる核の報復攻撃であった。

(文・下川)



謎の黒色石板「モノリス」は知的作用を持つ人工物として、時空を越えた4つの場所に登場する。草食動物と同じテリトリーに住むヒトザルの群れの前に突如現れたモノリス。これに触れ道具を使うことを覚えたヒトザルは肉食と化す。やがて水飲み場にやってきた(同じ種族)を(道具)を用いて「殺す」という禁断の垣根を踏み越えてしまう。武器化した骨はぼうり投げられ、弧を描き、次のシーンで静かに落下する宇宙船となつて降りてくる。このジャンプ・ショットによって、キューブリックは私たちに見たことのない美しい宇宙を見せてくれる。

次にフロイド博士は秘密裏に進められている月面の地下より発する電波の謎を解明しようと月のクラビウス基地へ向かう。地下より掘り起されたモノリスは木星へと向かう信号を発していた。さらに「木星探索計画18ヶ月後」、木星へ向かうディスクバリー号には5人の乗組員と、HAL9000と呼ばれる万能コンピュータが搭載されている。しかしHALはユニットの故障という過った報告を行い、乗組員の不信の中でいつしか任務を遂行するための万能な道具ではなく意志を持つようになる。HALによって船外活動中のブール副指揮官と冬眠中の3人の乗組員が殺され、ホウマン船長はHALによる船の制御を停止させ、その後木星探査の真の目的を知る。

ホーマン船長は単独で木星へと向かう中、浮遊するモノリスが現れる。モノリスが現れる度に奏でられるボーランドの現代作曲家リゲティのオラトリオは、それを包む大気のように奏でられ、科学では図り知れない崇高な、超自然的な印象を与えていた。

（文・下川）

アレックスは毎晩、不良仲間と共に暴力やセックスに明け暮れていた。ある夜、事故を装い助けを求める作家の家に押し入り狼狽つわで縛った夫の目前で妻をレイプする。そこには罪の意識のかけらもなく「雨に唄えば」を口ずさみながらタップを踏み、メロディに合わせて楽し気に夫婦を交互に殴りつける。ある日、アレックスは彼の横暴さに嫌気がさし仲間にによって裏切られ警察に捕まり14年の刑を言い渡される。刑務所で2年を過ごした頃、彼は「ルドヴィコ心理療法」と呼ばれる人格改変によって刑が軽減される噂を聞く。そして視察に来た内務大臣より被験者として指名され暴力やセックスにひどい嫌悪感を感じるという心理治療を施された。この療法では生理現象であるまばたきさえも拘束具によって禁じられ、また治療に用いられたナチのフィルムには、偶然かつて彼の敬愛したベートーベンの音楽(第九交響曲)が使われ、自らの意志に反して嫌悪するようになり激しく苦悩する。約2週間の治療の後、暴力やセックスに吐き気をもよおすようになつた彼は治療の効果が認められ、この療法によって社会の安全は守られるとして演説する政治家によつて社会に戻される。しかし両親の家にはすでに居場所がなく、街を彷徨うアレックスはかつて彼の暴力の被害に会つた人々から手酷い報復を受ける。そして耐えきれなくなつたアレックスは衝動的に自殺を図る。その後アレックスは強制治療の効果を解かれ、元の凶暴さを備えた人格を取り戻すのである。

アレックスが受けた「ルドヴィコ心理療法」は人格の中から悪を排除し、善悪の選択という権利と義務の双方を国家によって剥奪される行為である。悪の部分のない人は善人なのか?その集団として考えるならば悪の存在しない社会は健全だと言えるのだろうか?国家による管理社会のあり方を逆説的に描いた作品である。近未来的無秩序なロンドンの雰囲気には1970年代のボソップアーティスト、アレン・ジョーンズの女性のヌードを模したコロヴァー・ミルクバーの過激なインテリアや「ナッドサット言葉」(*), またシンセサイザーによるクラシック音楽の使用など、退廃した若者文化が効果的に描かれている。

アレックスは18世紀当時の光景を再現するために、ロウソクの光のみの夜の室内シーン撮影を試みた。そのため、NASAのためにツアイス社が開発した宇宙空間用の特殊レンズを映画カメラに取り付けられるよう改造した。自然光による屋外撮影も美しく、名手品のロケにはアイルランドまで足をのばした。しかし

（文・下川）



（文・下川）

2001年宇宙の旅

1968／カラー／139分

時計じかけのオレンジ

1971／カラー／137分

パリー・リンדון

1975／カラー／184分

STAFF ●制作/監督=スタンリー・キューブリック ●脚本=スタンリー・キューブリック/アーサー・C・クラーク ●原作=アーサー・C・クラーク「前哨」●撮影=ジヨーフリー・アンスワース ●音楽=アラン・ハチャトゥリアン・ジエルジー・リゲティ/ヨハン・シュトラウス/リヒャルト・シュトラウス ●衣装=ハーディ・エイミス ●プロダクション・デザイン=リトニー・マスター/ズ・ハリー・ラング/アーネスト・アーチャー ●CAST ●ケア・デュリア/ゲイリー・ロックウッド/ウイリアム・シルヴェスター/ダン・リクター/ダグラス・レイン/レナード・ロシター/マーガレット・タバサック/ロバート・ビーティ

STAFF ●制作総指揮=マックス・L・ラーブン/サイ・リトヴィノフ ●制作=スタンリー・キューブリック ●脚本=スタンリー・キューブリック ●原作=ウイリアム・マイケルビース・サツカ・バージェス「時計じかけのオレンジ」●音楽=ヘンリー・バーセル/ジオ・アキノ・ロッシー/ルートヴィッヒ・ヴァン・ベートーベン/エドワード・エルガー ●衣装=ミレナ・カノローネ ●プロダクション・デザイン=ジョン・バリー ●アート・ディレクター=ラッセル・ハッグ/ビーター・シールズ ●CAST ●マルコム・マクドウェル/パトリック・マギー/マイケル・ベイツ/ウォーレン・クラーク/ジョン・クライヴ/エドリエンヌ・コリ/カール・トウェリング

STAFF ●制作総指揮=ヤン・ハーラン ●制作/脚本=スタンリー・キューブリック ●共同制作=バーナード・ウライアムズ ●原作=ウイリアム・マイケルビース・サツカ・バージェス ●撮影=ジョン・オルコット ●音楽=ガオルク・フリードリッヒ・ヘンデル/ショーン・オリアンダ/ウォルフガング・アマデウス・モーツアルト/フランツ・シューベルト/アントニオ・ヴィヴァルディ ●衣装=ウラ・ブリックト・ソダーランド/ミレナ・カノローネ ●プロダクション・デザイン=ケン・アダム ●CAST ●ライアン・オニール/マリサ・ベレンソン/パトリック・マギー/ハーディ・クリューカー/ステイブン・バコフ/ゲイ・ハミルトン/マリー・キー



（文・木村）

(*): 英語化されたロシア語やジブジーの言葉、リズミカルなスラングなどから生まれた造語で原作者バージェスはロシアの「十代」を表す後尾辭から「ナットドサット言葉」と名付けた。ドルーグー友だちホーリーショーすばらしいトルチヨック打つ、殴る/イン・アウト・イン・アウト=性交など

シヤイニング

1980 / カラー / 142分



コロラド山中のオーバールック・ホテルに、冬期管理を任せられた作家志望のジャック・トランスが妻ウエンディと息子ダニーを連れてやってきた。そのホテルでは過去に、前任の管理人グレーイナーが孤独のために発狂し、妻とふたりの娘を斧で惨殺するという事件が起っていた。ダニーは超能力「シヤイニング」によって、ホテルに集う悪霊の幻影におびえる。閉鎖されたホテルはやがて雪に閉ざされ、外界との連絡は無線のみという孤立した環境となる。執筆のためにダイブライターに向かうジャックは、次第に狂気に駆り立てられていく。

雄大なロッキーの自然をとらえた冒頭の俯瞰ショットから、映画はオーバールック・ホテルの外観へ、さらにその内部へと導かれていく。日付もまた月単位から曜日、時間へと加速度的に萎縮していく。ジャックが狂気に至るまでの閉所恐怖と内的軋轢を観客は共有することになる。「シヤイニング」はそういういた心理的なものと、悪霊や輪廻転生といった超自然的なものとのバランスが保たれた希有の恐怖映画である。

恐怖の描写にあたってキューブリック作品の特徴ともいえるシンメトリカルな構図がこれまで貢献したことではないだろう。ホテルにあしらわれた神経を逆なでする強烈なシムストリー（家具の配置、カーペットの模様、庭に広がる生け垣迷路）たたずむ双児の姉妹）は、流れ寄せる血河や慘殺体、ジャックの発狂といった爆発的なイメージによって決壊するまで、視覚的な恐怖体験の礎となっている。当時はまだ珍しかったステディカム（カメラマンが走つても画面のフレームを抑えた映像が得られる手持ち撮影のシステム）の導入も、見事に恐怖描写に寄与している。三輪車でホテルの回廊をこぎ回るダニーを背後から追つた映像やラストの迷路のシーンなどがそれだ。

なお原作者スティーヴン・キングは1997年、「シヤイニング」を自ら映像化している。彼は「超自然的な含みは漠然としたままにとどめ、家庭内悲劇にしてしまった」と、小説のテーマとイメージを壊したキューブリックは映画に失望していた。（文・木村）

STAFF ●制作総指揮・ヤン・ハーラン ●制作・スタンリー・キューブリック ●脚本・スタンリー・キューブリック／原作・スティーヴン・キング ●撮影・シヤイニング ●撮影・ジョン・オルコット ●音楽・ジエルジー・リゲティ／ベラ・バルトーク／クリシュトフ・ベンデレツキ ●衣装・ミレナ・カノネー ●プロダクション・ショーン・デザイン・ロイ・ウォーカー ●アート・ディレクタードレス・トムキンズ CAST ●ジャック・ニコルソン／シエリー・デュヴァル／ダニー・ロイド／スティーブ・マーリー・クローザース／バリー・ネルソン／フィリップ・ストーン

フルメタル・ジャケット

1987 / カラー / 116分

Full Metal Jacket

SAWSKA口ライナ州の海兵隊新兵訓練基地に、8週間の軍隊教育を受けるため、ジョーカー、パイアル、カウボーイらが入隊してきた。口汚い教官ハートマンによる容赦のないしづきの中、パイアルは精神に異常をきたしていく。ついに卒業前夜、彼はハートマンを撃ち殺して自殺してしまう。広報の報道隊員としてダナン基地に配属されたジョーカーは、比較的のんびりした生活を送っていたが、北ベトナム軍のテト（旧正月）攻勢が始まり、最前線のフエ市を取材することになる。そこでカウボーイと再会。だがその喜びも束の間、カウボーイは偵察中に敵の敏腕の狙撃兵に撃ち殺されてしまう。復讐のため、ジョーカーは敵の潜む廃ビルに侵入するのだが…。

ベトナム戦争の生傷が癒え始めた70年代後半から、『ディア・ハンター』『地獄の黙示録』『プラトーン』など、アメリカでは立て続けにペトナム戦争ものの映画が作られた。この作品はその一群の中でも後期のほうに位置しているが、戦闘シーンの舞台がお馴染みのジャンルではなく、ベトナム市街地であつたことが目を引く。驚くべきことに、キューブリックはスペインから大量のシユロの樹を取り寄せ、ondonロケを敢行した。『フルメタル・ジャケット』とは銃弾の弾倉の被甲のこと、銃カタログでこの言葉を見つけたキューブリックは、響きの美しさにひかれ映画タイトルに引用した。『ボーン・トゥ・キル』と書かれたヘルメットを頭にかぶり、胸にビースボタンをかけるジョーカーのよう、この言葉はメタル（固い）／ジャケット（柔らかい）という両義性を備えている。

映画は前半部の螢光灯下の整然とした訓練所と、後半部の戦火に焼け崩れたベトナムの市街戦といふ2部構成になっている。前半部の訓練所の描写は鮮烈で突出しているが、ラストで敵の狙撃者の正体が遂に明かされるとき、いやおうなく観客は、殺人マシーンを効率的に生産する訓練所でのプロダクションが、アジアの小国では何の意味をも持たなかつたことを確信させられる。（文・木村）



STAFF ●制作総指揮・ヤン・ハーラン ●制作・スタンリー・キューブリック ●脚本・スタンリー・キューブリック／原作・W・クック ●脚本・スタンリー・キューブリック／フレデリック・ラファエル ●原作・アルトウール・ショニツラ「夢小説」 ●撮影・音楽・アビゲイル・ミード ●衣装・ジョン・バーカンショウ ●プロダクション・デザイン・アントン・ファースト CAST ●マシュー・モディーン／アダム・ボールドウイン／ヴィンセント・ドノフリオ／リリー・アーメイ・ドリアン・ヘアウッド／ケヴィン・メジャー・ハワード／アーリス・ハワード／エド・オーロス／ジョン・テリー／ベニソン・ソウリス／シンドニ・ボラック／レスリー・ロウ／ピーターベンソン／シヤイキ・ソウリス／シンドニ・ボラック／レスリー・ロウ／ピーターベンソン／

アイズ・ワイド・シャット

1999 / カラー / 159分

Eyes Wide Shut

二ニューヨークに住む内科医ビルは、妻アリスと娘とともに裕福で幸せに満ちた生活を送っていた。ある夜、夫妻はビルの患者であるジーラーの主催するクリスマス・パーティに出かけた。ビルはそこでドラッグのために意識を失つたシーグラーの情婦・マンディを介抱する。翌日、マリファナを楽しんでいた夫妻はささいなことから口論となる。激昂したアリスの性的欲望の告白を受けながらも、ビルは急患のために家を後にする。性の妄想に取り憑かれたビルの彷徨が始まると、やがて好奇心から潜入した秘密の仮面舞踏会で、ビルは大きな陰謀に巻き込まれていく。

死の縁をさまよう全裸のドラッグ中毒患者・マンディの背後には、彼女に似たボーズで横たわる裸婦像が飾られている。その存在が予告するように、この映画では性と死、現実と夢とが密接につながりあつてゐる。妻の性的夢想の告白を受け、ビルは嫉妬に駆られながら夜の町を徘徊する。そこで彼を待ち受けるのは、愛を告白する死んだ患者の娘、HIV陽性の売春婦、黒魔術的な乱交パーティー…。結局ビルは、妻に望んだ貞淑さを自ら持ちえたことによって、性的誘惑、死刑から逃れて妻の枕元へと帰還する。

夫の体験した文字どおり夢のような出来事に対し、アリスは言う、「現実であれ夢であれ危険な冒険から無事生還したことに感謝しなければいけない」。夫をベッドに急がせるアリスの提案は、端的で明確だ。けれどもキューブリックが彼らの愛の物語に肯定的であつたかどうかは分からぬ。

アリスの裸体を背後から覗き見るようになると、オーブ二ング。まぶたを閉じるように暗転して幕を開けた『アイズ・ワイド・シャット』は、ビルの表情を隠すをとらえた奇妙なショットで

宮にほうりこまれたままだ。

（文・木村）

『博士の異常な愛情』

又はキューブリックは如何にして軍拡の時代に核に対する憂慮を抱いていたのか

文・下川クミカ

1942年、アメリカ、ロスアラモスでは「マンハッタン計画」と呼ばれる原爆開発プロジェクトが開始された。ヒトラー率いるナチス・ドイツ軍やソビエトのスターリンより先に原爆を持つ必要があったのだと言われている。いわば一種の防衛としての核開発であった。ヒトラーの自殺によりその必要性がなくなるが、ソビエトに対して核抑止策を推し進めるため開発は続けられ、1945年には広島と長崎の2つの都市に投下された。当初、世界のどこか影響の少ない場所で、日本の軍部の人間の前で原爆実験を行うことで、その効果を見せつけることが提案されていたが、その核兵器は実際には2つの都市の30万人以上の命を奪い、一命をとりとめた人々にとっても被爆症との闘いという辛い人生を与えた。広島に投下されたのはウラン型爆弾で通称リトル・ボーイと呼ばれていたのに対して、長崎に投下されたプルトニウム型は複雑な起爆装置を必要とし、爆弾は臨界に達しないプルトニウムを大量の爆薬で閉むため胴回りが太く、通称ファット・ボーイと呼ばれていた。ウラン235の分離は手間を要し、広島に投下された後も日本の軍部は1945年に2発目はあり得ないと踏んでいた。その2発目を可能にしたのはフォン・ノイマン(*1)による爆縮と爆縮レンズの考案によるものであった。起爆装置や爆縮レンズの設計には高速計算(*2)を要したこと、後にノーマン・アーキテクチャと呼ばれる現在のコンピュータの原型が生まれる。

非人道的な行為は世界から非難されるが、核開発は停止することはなかった。1949年にはソビエトが核保有宣言をすると英國もそれに続き1952年に最初の核実験を行った。1950年代に入ると核は水爆の時代を迎える。1954年に太平洋上で操業していた日本の漁船、第五福竜丸は警戒水域外であったにもかかわらず、アメリカによるビキニ環礁での水爆「プラボ」実験で被爆し、死者を出した。

米ソの冷戦下では水爆の開発によって核は新たな局面を迎える。1メガトン(NT火薬で100万トン)の輸送は人工衛星や大陸間弾道ミサイルといった開発によって新たな核の移動手段を生み出した。1957年ソビエトはいち早く人工衛星スプートニク1号を地球の軌道にのせたことを公表し、それはアメリカを核攻撃の射程におさめることを意味するという軍事的優位に出た。翌年にはアメリカもエクスプローラーの打ち上げに成功し、宇宙開発という名目の軍拡競争でもソビエトに遅れをとることなく続いた。そしてさらなる軍拡が進み抑止政策として核のバランスが危ぶまれる時代に突入する。そして抑止にとどまらぬ動きもあった。

1959年、革命によって誕生したキューバのカストロ政権はソビエト首相のフルシチョフと手を結び、アメリカに向けての核の配備をはじめる。1962年10月14日、アメリカの偵察機U2が撮影した写真にはアメリカに砲台を構えた中距離用のミサイル台が写されていた。〈キューバ危機〉と呼ばれるアメリカの長い2週間の始まりである。

フルシチョフに根気よく交渉を続けるJ.F.ケネディ大統領らに対して、軍部からは先制攻撃を強く推す声も多く、10月22日にキューバの封鎖を行い、公表してからは世界的な憂慮に満ちていた。数日後にはアメリカのU2偵察機がキューバ付

近でソ連軍に撃墜され、さらに大西洋上を核武装したアメリカ機が旋回し、海上では米ソの軍艦が封鎖線上に集結した。一触即発の中、アメリカはソ連を射程にしたトルコ配備のミサイルの撤去を引き換えに、翌28日のモスクワ中央放送はキューバからの武器撤退を報じ、2週間に及ぶキューバ危機は回避された。この事件を機に米ソ間にはホットラインが引かれた。

キューブリックが『ロリータ』撮影後に『博士の異常な愛情』の原作小説である『赤い警報』(*3)の映画化権を3500ドルで取得したのは1962年、まさに軍拡の時代であった。キューブリックは核の安全装置の不良や、たとえ正確に設計された装置でもその安全効果は30年を過ぎると信頼できないものになると語っている。(*4)また、核にかかる軍部の人間が精神科医にかかっていても、極秘任務であったゆえ、医者もその人物が核関連の仕事についていたことを知らされていなかったことに対する恐怖。単純には「(中略) キューバ危機の最中に頭のおかしなウエイターがケネディ大統領の飲み物にLSDを入れたらどんなことになっていたと思う?あるいは向こうのフルシチョフのウォッカに?そう思うとぞっとするじゃないか」(*5)と、絶えまなく偶発的に起こりうる事故を考えていた。

1960年代後半には大国でのベクトルが軍縮の方向に向くものの、一方では第三世界への核の拡散という新たな問題を生んだ。また軍縮の動きで核の平和利用も叫ばれた。現在でも核エネルギーは我々の生活の全般、医療にも有用な存在であることは勿論であるが、平和利用と軍事利用の距離の近さにも敏感である必要があるようだ。フォン・ノイマンによる核開発の副産物であるコンピュータも、現代生活にかかせない物の一つであるが、便利なものの域を越えてその高性能ゆえに兵器になりえるのだという。

最後に桁外れの天才と呼ばれたフォン・ノイマンは1957年、癌のためワシントンで53歳の生涯を閉じた。発病は核実験に立ち会った影響だと言われている。そんな事実にさえキューブリックが『博士の異常な愛情』で用いたブラック・ユーモアが思い出される。

(*1) ジョニー(ジョン)・フォン・ノイマン: 1903年ハンガリーの首都ブダペストで銀行家の長男に生まれ、幼い頃より学問全般に才能を發揮。特にすぐ抜けてその才能を現わしたのは数学であり、10代の後半にはすでに數学者としての業を残している。数学以外の分野では理論物理、応用物理、気象学、生物学や「ゲームの理論」で知られる経済学の業績など多分野で足跡を残した。「マンハッタン計画」ではアメリカが核を保有することはソ連に対する抑止効果となり、世界の安定的平和が望まれるという意志の下に開発が進められた。1940年代のアメリカの核抑止政策の立役者であり、コンピュータの開発には新しいアイデアを持ち込んだ人物である。

(*2) 爆薬の扱いにはいつも数学的な計算がつきまとった。1930年代、動かない標的に対する簡単な弾道計算の場合ですら、約750回のかけ算を必要としていたことからも高速計算機が望まれていた。

(*3) 元英国空軍航空士のピーター・ジョージが書いたサスペンス・スリラー「破滅への二時間」はイギリスでは1958年に出版された。アメリカでは「赤い警報」というタイトルで、翌59年に出版された。

(*4) 旧ソ連の核弾頭の安全保障期間は15年で、すでにその期間の過ぎた核兵器…いわば賞味期限切れの核弾頭3000発余を抱えた現ロシアでは、その保管や安全性、また処理にも莫大なコストがかかるという大きな問題を抱えている。

(*5) 1968年ブレイボイ誌インタビューより

写真:『博士の異常な愛情』では実際の原水爆の爆発を記録したフィルムが使用されている



■今日はスタッフ全員で「いつかはやりたい」と考えていた念願のキューブリック特集を組むことができました。■またこのテーマは課外講座と連動させることで、皆さんと一緒に大きなスクリーンでキューブリック作品を見る機会を作っていくたいと思います。これは平成15年度前期のテーマとして数回に渡って行いたいと考えています。■課外講座のお知らせは掲示、配布物をご覧頂くかカウンターでお尋ねください。

編集委員 板屋 緑一映像学科 教授
下川クミカ 狩野 志歩
木村美佐子 田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第13号 2003年4月発行

武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 Tel/Fax: 042-342-6072
禁無断複製・転載

出典・参考資料

「キューブリック」 ミシェル・シマン/著 内山一樹/監訳 白夜書房
「キューブリック全書」

デイヴィッド・ヒューズ/著 内山一樹・江口浩・荒尾信子/訳 フィルムアート社
「ザ・スタンリー・キューブリック」キネマ旬報社/編 キネマ旬報社
「未来映画術『2001年宇宙の旅』」ピース・ビゾーニ/著 浜野保樹・門馬淳子/訳 晶文社
「メイキング・オブ・2001年宇宙の旅」
ジェローム・アジェル/編 富永和子/訳 ソニー・マガジンズ
フィルムメーカー8「スタンリー・キューブリック」 齋孝之/責任編集 キネマ旬報社
「キューブリック」月刊イメージフォーラム 1988/4月増刊 ダゲレオ出版
「月刊イメージフォーラム」 1988/6月 ダゲレオ出版
「月刊イメージフォーラム」 1999/Vol.1 No.2 ダゲレオ出版
「キネマ旬報」 1999/4月下旬号 キネマ旬報社
「キネマ旬報」 1999/8月上旬号 キネマ旬報社